



カリフォルニア滞在記

技術士補（化学部門） 柘植 節子

1. はじめに

2003年（平成15年）の3月から12月まで夫の仕事のため、アメリカカリフォルニア州のサンタバーバラ郡（Santa Barbara）で1歳半の子供を連れて暮らしました。その折に何回か青年技術士協議会のメーリングリストに、「カリフォルニア主婦雑記」と称して投稿致しました。以下、その頃の主婦生活の中から書かせていただきます。

2. サンタバーバラの紹介

我々の暮らしていたサンタバーバラ郡は、ロサンゼルスから車で2～3時間の距離にあり、人口は40万人、中心部のサンタバーバラ市はスペイン風の赤いレンガ屋根と白壁の建物が多いことで観光地として有名です。条例により町の中心部に新築する建築物はスパニッシュ・コロニアルとよばれるその様式にしなければならず、マクドナルドやスーパーマーケットさえもがほかの街とは異なった風情です。た

だし、我々の家自体は中心部から20kmほど西寄りのGoleta市にあり、アメリカのごく普通の郊外住宅地でした。

地中海性気候のため、乾季は札幌の初夏～真夏並みの気温と、西海岸らしい強い日差しが続きます。乾季には山の木が枯れ乾燥するために州のあちこちで大規模な山火事が発生し、サンタバーバラでも終日煙が立ち込めたり、もっと困ったことにLAからの幹線道路が数日閉鎖されたりしたこともありました。

サンタバーバラにはカリフォルニア大学の分校があるために学生ばかりの学生街がある一方で、事業で成功し引退した人たちが住んでいる邸宅街があり、スペイン語を話すいわゆるヒスパニックの人々が多く住む地区もあります。郡の統計では、一番多いのは白人（ヒスパニック以外の）で、2位はヒスパニック、その8割がメキシコ系の人たちです。街の公共機関、商品の表示など殆どあらゆるものに、



サンタバーバラ中心地の町並み



乾季の草の枯れた山並み

英語とスペイン語の表示があるのには、当初驚きました。ラジオ局・地元の新聞もスペイン語のものが相当数あります。

3. 食生活（スーパーマーケット）

アメリカの外食は美味しくない、との悪評どおり、チェーン展開のレストランなどでは、塩と砂糖と油が多めで量も多すぎる上にカリフラワーが生のままサラダに入っていたり、さんざんでした。とはいえ土地柄メキシカン料理は美味しく、お気に入りの店がいくつかできました。日本料理店も、よくよく探せば「謎の日本風アメリカ人向け料理」でがっかりせずにすむことが、わかってきました。

とはいえ、殆どの食事は自分で作っていたので、スーパーマーケットには実によくお世話になりました。スーパーに入って最初に目に付くのは野菜売り場です。種類は日本より豊富です。たとえば、かぼちゃの親戚のスカッシュなら、日本のかぼちゃを含め6、7種類あり、レタス・白菜などの青菜も日本の2、3倍の種類があります。西洋野菜に加えて、カリフォルニアという土地柄、アジアの野菜も栽培されており、メキシコ等からは中南米の野菜が輸入されているからです。ただし陳列棚には傷んでいる



色とりどりのスカッシュたち
(ハロウィンシーズンには、店頭に並ぶ種類が増えます)

品も多く、自己責任で吟味しなくてはなりません。

サプリメントやオーガニックフードが普及している一方で、ジャンクフードやインスタント食品は予想通り氾濫していました。日本のカップラーメンやインスタントラーメンも立派にアメリカ市場に進出していました。アメリカのインスタント食品といえば、有名な「TV ディナー(パスタと主菜とつけ合わせがトレーに乗っていて電子レンジで夕飯が出来上がるもの)」が普及しています。子供を3人カートに乗せた女性が、同じTV ディナーの箱を十数個カートに載せているのを見ました。いくつか試してみましたが、結局「あたり」にはめぐりあえませんでした。



スーパーマーケットの入っているモール
(必ず広大な駐車場があります)

4. 英語力向上

今回の滞在の中での私自身の目標は、英語力の向上でしたので、少し自分なりに努力してみました。

渡米当初1カ月は家族としか話さず、日本語の童謡CDを流し、「おかあさんといっしょ」のビデオを見るという生活で、まるで日本と同じでした。そんな生活を続けても勿論英会話能力など向上するはずもなく、地元の英会話教室に通い始めました。ネイティブのボランティアと外国人参加者数人でテーマに沿って話すというものです。他の国の人のお国訛りの強い英語が聞き取れず四苦八苦しますが、自分の意見を述べたり他の人の意見にコメントしたりする必要があるので、スピーキングのいい練習になりました。国籍・背景さまざまな人々と接することのできる貴重な機会でもありました。

また、夏には大学の講義を聴講したり、秋には週5日の集中英語講座に通ったりもしてみました。どちらも予習復習やレポート、口頭発表など課題が多く、学生時代に戻ったような緊張感を楽しめました。

結局いろいろ頑張った挙句に悟ったのは、短期間では語学に大きな進歩はないということと、いいことを(たとえジャパニーズイングリッシュでも)はっきり発音して論理的に伝えることが何より大切だということ、そして言葉の壁を越えて知人友人はできるという、当たり前のことでした。



語学学校のクラスメート
(日本、韓国、スイス、ベネズエラ、ブラジル、ロシアと国籍もさまざまです)

5. 保育園 (Daycare)

通学する間は子供を現地の保育園に預けました。この daycare とは、日本での保育園と幼稚園の両方に相当します。つまり、共働きの親も専業主婦(夫)の親も同じ施設に預けるのです。親の片方が在宅の場合は、週2、3日か午前中のみ預ける場合もあるようでした。保育時間が違う子供たちが混在しても特に問題はないようでした。早期教育は日本以上に過熱しているので、教育内容(読み書き、算数、音楽、絵画、バレエ等)が充実している旨うたっている施設も多くありました。保育費用は見学した範囲では、フルタイムで\$655~910(当時は1ドル110円だったので72,050~100,100円相当)と、札幌の認可保育園の費用と比べるとかなり高額でした。

通い始めた時、子供は1歳半で英語は全く解さなかったもので、和英対応表を作って担任に渡したところ、「Mommy is coming back soon.」も和訳して

くれ、と言われてました。泣く子を抱いてこう諭すのだろうな、と、ほろりとしたものです。ところがその表が必要だったのは最初の1週間のみで、後は英語だけで大丈夫でした。子供は帰国直前には日本語と英語とを同じくらい話すまでになりましたが、帰国後1年たった今では、ほとんど忘れたようです。英語は忘れても構わないから、人種など気にせず誰とでも友達になった頃のことを、心のどこかで覚えていてくれれば、と親としては思っています。



保育園での持ち寄りクリスマスパーティの様子
(親も参加します)

6. おわりに

我々が渡米したのは、アメリカ軍がイラクでの戦闘を開始した直後で、空港での入国審査もそれ以前より格段に厳しいものでした。そしてフセイン元大統領がアメリカに拘束されたのは帰国の3週間前でした。我々の滞在期間は、アメリカ人の愛国心がはっきり表面に出てきていた時期だったのです。CNNなどの戦況報道は常にアメリカの愛国心を鼓舞する内容に思えました。リアウィンドウに星条旗を貼り付けている車も目立ちました。一時滞在の外国人としては何となく居心地の悪いような息苦しいような雰囲気でした。けれどもアメリカ人とは決して単色の思想に凝り固まった人々ではないのだとわかることも多くありました。はっきりとイラク戦争に反対を表明する人たちに個人的にも何回も出会いました。そのように個人の意見を表明できる自由のある国というのがアメリカの本質の魅力的な一面であるのでしょう。またこの国を訪れる機会をつくりたいものだと思っています。